

主 題：見えない人が見た光**聖書箇所：ヨハネの福音書 9章1－12節**

この朝、見ていきたいのはヨハネの福音書9章のみことばです。特に、1－12節を学びたいと思います。きょうから私たちは、新たに9章の内容に入っていきます。この福音書を見始めてから1年半以上も経つ中で、まだ全体の半分にもたどり着いていないのですけれども、少しずつ愛するイエス様の姿をいっしょに学んでいければと思います。

●しるし

今回、新しい場面に入る機会に、少し大切なことを確認しておきましょう。この福音書の中には、“わたしは何々である”という有名な七つの表現が出てくると並んで、イエス様によってなされた七つの特に驚くべきしるし、奇蹟が出てきました。一つ目のしるしは、カナの婚礼で水をぶどう酒に変えるというものでした。ヨハネ2章でそのことを見ました。二つ目は、病気にかかって死にかけていた王室の役人の息子をいやすというものでした。ヨハネ4章に出てきました。三つ目は、ベテスダの池のそばで、三十八年間歩けなかった人をいやすというものでした。ヨハネ5章に出てきました。4つ目は男性だけで五千人以上の群衆を五つのパンと二匹の魚で養うというものでした。ヨハネ6章で見ました。五つ目は、荒れ狂っている嵐の中で湖の上を歩くというものでした。同じくヨハネ6章でそのことを見ました。これまでに私たちは五つのものを学んだのです。そして、これらはどれを取っても人の理解をはるかに超えている驚くべき奇蹟でした。

しかし、著者のヨハネは、このような奇蹟を単に奇蹟とは呼ばずに「しるし」と表現しました。「しるし」と言われているのには意味がありました。それは、イエス様がなされていた奇蹟は、奇蹟そのものよりも奇蹟を行った方がだれかを示す「しるし」としての役割がありました。言い換えれば、水をぶどう酒に変えたことは、単に「すごいことが起こりました」ではありません。これはイエス様が、力強い創造主であることを明らかにするものでした。五千人を養ったことは、イエス様がいのちのパンであることを明らかにし、荒れ狂っている湖の上で歩いたことは、イエス様こそが自然さえ支配されている主であることを明らかにするものでした。ヨハネの福音書の中に出てくる「しるし」は、常にそれをなしているイエス様が、だれなのかを人々の前で明確にし続けてきたのです。

そして、それには目的がありました。この手紙が書かれた目的と同じです。この手紙が書かれた目的は、イエス様こそが神の子・キリストであることを人々が知って、この方をすなおに信じるためでした。すべてのものがイエス・キリストが神の子であることを指し示していたのです。そして、これから私たちが見ていく箇所には、六つ目のしるしが描かれています。イエス様は六つ目のしるしとして、生まれた時から目の見えない人をいやすことをなされます。これから私たちはそれを見ていきますけれども、これも同じであると覚えていてください。単に、奇蹟に目を留めるのではありません。その奇蹟を通して、明らかにされている主の姿に目を留めてみましょう。きょうは、1－12節を大きく四つの場面に分けて、考えてみたいと思います。改めて、自分のこととしてイエス様とはどのようなお方なのか、そして、イエス様がどのようなことを教えようとされているのかをよく考えてみてください。では、みことばをお読みします。神様が与えてくださっているみことばに、それぞれよく耳を傾けてみてください。

ヨハネ9：1－12

「:1 またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。:2 弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」:3 イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に

現れるためです。:4 わたしたちは、わたしを遣わした方のわざを、昼の間に行わなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。:5 わたしが世にいる間、わたしは世の光です。:6 イエスは、こう言ってから、地面につばきをして、そのつばきで泥を作られた。そしてその泥を盲人の目に塗って言われた。:7 「行って、シロアム(訳して言えば、遣わされた者)の池で洗いなさい。」そこで、彼は行って、洗った。すると、見えるようになって、帰って行った。:8 近所の人たちや、前に彼が物ごいをしていたのを見ていた人たちが言った。「これはすわって物ごいをしていた人ではないか。:9 ほかの人は、「これはその人だ」と言い、またほかの人は、「そうではない。ただその人に似ているだけだ」と言った。当人は、「私がその人です」と言った。:10 そこで、彼らは言った。「それでは、あなたの目はどのようにしてあいたのですか。:11 彼は答えた。「イエスと言う方が、泥を作って、私の目に塗り、『シロアムの池に行って洗いなさい』と私に言われました。それで、行って洗うと、見えるようになりました。」:12 また彼らは彼に言った。「その人はどこにいるのですか。」彼は「私は知りません」と言った。」

○世の光である御子と盲人：四つの場面

1. 深刻な問題 1-3 a 節

では、一つ目の場面からいっしょに考えてみましょう。一つ目は、深刻な問題です。ある日 イエス様と弟子たちは 大きな困難を抱えていたひとりの人物に出会いました。みことばをもう一度見ていただくと、1節はこのように始まっています。「またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。」と。この出来事が、いつどのタイミングで起こったのか詳しいことはよくわかっていません。どの通りで、彼らが盲人に出会ったのかは明らかではありません。ただ言えるのは8章の終わり、エルサレムの神殿でご自分を憎む者たちから石を投げられそうになっていたイエス様は、まだ同じエルサレムの町にとどまっていたのです。この後出てくる「シロアムの池」という場所はエルサレムの町の南の端に位置して、神殿から約600から800メートル離れたところにありました。いのちをねらわれるという危険な目に遭ったイエス様は、町から出て遠く離れた場所で働きをすることも可能でした。しかし、イエス様はそうはなされず、町の中を歩いていた時に盲人を見つけられたのです。ここで、注目してほしいことばが二つ出てきました。

▶「生まれつきの盲人」

一つ目に、1節のところに「生まれつきの盲人」ということばが出てきます。「生まれつき」とは、この人はある時点までは見えていたのに、途中で視力を失ったというわけではありません。この人は、人生で一回も何かを見たことがない人物でした。木や草花、空の美しさも一度も見たことがありません。日々、音は耳にしている、まわりにはいる動物も空を飛ぶ鳥も、また目の前を通り過ぎていく人々の姿も一度も見たことがありません。ましてや自分の両親の顔ですら一度も見たことがありません。まさに生涯を完全な暗やみの中で過ごしていた人物が、この盲人でした。彼は、深刻な状況に置かれていたのです。

▶「見られた」

二つ目に、そのような状態にあった人物をイエス様は見られていました。1節の最後に書いていました。「……生まれつきの盲人を見られた」と。普段読んでいたらさっと読み飛ばすかもしれませんが、少し想像してみてください。道にいたのはひとりの盲人でした。イエス様は彼のそばを通っても何も気づきませんでした。ましてや自分自身のいのちがねらわれた後の話です。ほかの人のことをいっさい気かけず、町を静かに去って行ったとしても、その盲人は、イエス様に気づくことはありませんでした。暗やみの中にいた彼は、何も気づくことができない、文字どおり無力な存在だったのです。しかし、そのような絶望的な、何もできなかった彼のことをイエス様が見られていました。イエス様が、目を留めていたと言うのです。この人が、先に求めたからではありません、イエス様がこの人を追い求められました。深刻な問題を抱えている者を決して見捨てようとされず、あわれみを示してくださるお方が、私たちが愛している救い主イエス・キリストでした。この方はあわれみ深いお方でした。

しかし、そのようなあわれみ深い方と対照的だったのが弟子たちでした。盲人を見つけた後の彼らの取った行動が、続く2節に描かれています。「弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」と。苦しみの中にいる盲人を前にして、弟子たちが真っ先に取った行動は質問することでした。彼らは目の前にいる人物を自分たちがあわれみを示すべき対象として見るのではなく、解決すべき問題として見ました。その人の苦しみや必要を覚えて、寄り添おうとしたイエス様とは違い、彼らはこの人の抱えている苦しみを憶測と疑いの目で見ていたのです。弟子たちは「……彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」と聞いていました。彼らは、この人の悲惨な状況を、彼自身もしくは彼の両親の罪にすぐに結びつけていました。これは、彼らだけの話ではありません。実際この時代の社会において、人々の間で普通に広まっていた考え方でもありました。当時のユダヤ教の教師、ラビが残した文献にもこのようなことばが残されています。「罪なくして死はなく、不義なくして苦しみはない。」(ラビ・アンミ)。多くの人たちは、何かしらの大きな悲劇や痛みを味わっている人がいたら、それは犯された罪が原因であるとあたりまえのように考えていました。

そして、これはある意味で真実でもありました。私たちはよく知っています。最初に、神様がアダムとエバを造った時、この世界のすべてのものは非常に良いもので、病気も争いもありませんでした。しかし、アダムとエバが神様に逆らって、罪が入った結果、すべてが壊れました。完璧だった世界は、罪によって汚れるようになり、墮落したこの世に墮落したからだを持って生きている私たちは、多くの苦しみを味わうようになりました。確かに罪はそのような結果をもたらしました。ある意味罪は病や痛みの原因となっているのです。また加えて罪人の私たちが神様に逆らって罪を犯す時、神様は時に報いとして、病や死をもたらすことも実際にありました。覚えていますか？アナニアとサツピラは、聖霊を欺いてうそをついた結果、いのちを取られました。また、パウロもコリントの兄弟姉妹に対してきびしく述べていました。Iコリント11：29-30にこのように書いています。「:29 みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくことになります。:30 そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。」と。実際に、コリントの教会の中に起こっていたことでした。ある者たちは主の晩餐を軽んじて、主のからだと血に対して罪を犯していたからこそ、病気をわずらっているのちを取られました。確かに、罪は時にひどい病や痛みをもたらす直接的な原因にもなり得るものでした。

しかし、今回の箇所は、私たちにもう一つの真実を教えてください。それは、すべての病や苦しみが常に人が犯す特定の罪が原因ではないということです。聖書ははっきりと私たちの経験している悲劇が、いつも自分たちの犯す罪によるものではないことも教えてくれていたのです。3章の初めにこのように続いています。「イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。……」とはっきりと言われていました。盲人が味わっていた絶望的な苦しみ、終わらない痛みは、彼の罪でも両親の罪のゆえでもありませんでした。だれかが犯した特定の罪が原因ではなかったのです。弟子たちは間違っていました。ここで一つだけ私たちが学べることがあります。それは正直になると、私たちも弟子たちのようにふるまっていることがあります。私たちがだれかの困難を見る時、あわれみを示すことよりもすぐにその人がなぜ苦しんでいるのか、原因を探そうとすることがあります。何かしらの罪や問題を持っているに違いないと、この人に大変なことが起こっているのは、その人が何かしたに違いないと、そのように私たちは憶測の目を持って、心から寄り添うことをしないことがあります。

まさにヨブの友人たちがそのような存在でした。ヨブは自分の財産や家族を失って、自分の健康も失いました。そのような彼のもとに、友人たちは訪ねて来て、最初はヨブを慰めようとしてきました。ひどい苦しみや痛みの中にあるヨブのそばにしようとしました。七日間、友人たちは何もしゃべりませんでした。しかし、八日目になった時、彼らの口から出てきたことばが何だったのかをヨブ4：7に、このように書

いています。「さあ思い出せ。だれか罪がないのに滅びた者があるか。どこに正しい人で絶たれた者があるか。」と。彼らのうちにあった間違いは、ヨブのうちに問題があると決めてかかるあわれみのない態度でした。もちろん私たちのうちに、罪があるのか、ないのか、吟味することは、私たちにとって大切です。しかし、あわれみのない心は問題でした。ヨブの友人にしても、弟子たちにしても、彼らは苦しむ者に寄り添うよりも自分たちの考えを正しいとして、目の前の者をさばっていたのです。あわれみのないさばく心は、私たちの模範である主の姿とは全くかけ離れている態度でした。弟子たちはこの時何もわかっていませんでした。だからこそイエス様は、彼らに目の前の深刻な問題を抱える者に対して、なぜ問題が与えられているのかを語られます。その目的を彼らに明らかにされるのです。

2. 主権的な目的 3b-5節

二つ目に見て取れる場面は、主権的な目的です。弟子たちが思い込んでいたように、この盲人が苦しんでいる目の見えなさが、罪が原因でなかったとしたら、どうしてこの盲人は生まれながらにそのような暗やみの中で、絶望を味わい続けなければいけなかったのでしょうか？その答えをイエス様が明白にされていました。3節でこのように言われています。「イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。」と。どうしてこの人に苦しみが与えられていたのでしょうか？イエス様の答えは、「神のわざがこの人に現れるため」でした。罪が原因だったのではありません。神のわざがこの人のうちに現れるためでした。言い換えれば、彼の苦しみは 神様の力と知恵が示され、神様の栄光が現されるために与えられていたものだったのです。

少し立ち止まって、考えてみてください。私たちは、それぞれにさまざまな困難に直面します。私たちの頭では、全く理解できないし、ことばでも説明ができない問題が、突然降りかかってくることもあります。多くの場合、私たちは何のために自分が苦しんでいるのかわからなくなると、「なぜ？」という疑問や苦しみを心の中でつぶやきたくなるでしょう。皆さんの中で、実際に今そのような難しさを経験している人もいるかもしれません。そのような状況にあって、私たちはどのような希望をみことばから見いだせるのでしょうか？みことばは、一つの真理を私たちにあわれみをもって教えてくれます。それは、神様はご自分の栄光をどのような時も、たとえ私たちの目には良いと思われたい状況を通して明らかにされるのです。

私たちは苦しみに直面する時、いろいろなことを考えます。そのように考える中で、陥りやすい罠があります。一つに、私たちは苦しみの中にある時、目の前で起こっていることをすべて理解したいと思うことがあります。そして、私たちは心の中で納得できる答えを手に入れば、自分は神様に信頼しますと口にすることがあるのです。また、それだけではなく、もう一つ陥りやすいことは、私たちは神様の姿を自分の置かれた状況に合わせて作り変えようとする場合があります。神様をみことばを通して見るのではなく、私たちは状況を通して神様を見ようとします。そして、そのような目で見ることこそ、たとえ聖書から知識として、神様が愛であることや、良い方であること、主権者であることを知っていたとしても、自分の目にそのように映っていないからこそ、神様の性質そのものが違っているのではないかと疑ったりするのです。理不尽な苦しみに置かれる時、そこにはいろいろな誘惑があります。そして、その誘惑は私たちの心を神様から遠ざけようとします。神様をあるべき中心の位置に据えるのではなく、私たちの思いや考えや状況をいつも中心において、そこから判断しようとする誘惑をもたらします。

しかし、私たちにできる感謝な応答がありました。苦しみの中でできる私たちの応答は、どのような時も聖書に示された神様の姿を信じて、そしてその神様の考えに自分自身をすなおに従わせ続けることでした。それが私たちにとって大きな喜びをもたらしてくれる希望の生き方になります。どうして私たちがいつもみことばが示している神様の姿に、身をゆだねることが大切なのでしょう？それは、根本的に神様の道と私たちの道が違っているからです。そして、神様の思いこそ私たちにとって最善のものでした。イザヤ55：8-9にもこのように書いています。「：8 「わたしの思いは、あなたがたの思いと異な

り、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——【主】の御告げ——:9 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」と。神様がなされていることが、私たちにわからないのはある意味当然かもしれません。私たちの道よりもはるかに高いのが神様の道です。そして、私たちはいつも覚えていることができます。私たちの道よりもはるかに高く、私たちの思いよりもはるかに高い神様の力は、すべてのうちに働いています。この神様のうちにアクシデントもサプライズもありません。この方は最初からすべてのことをご存じでおられ、すべてのことを通してご自分の民を愛し、そして偉大さをすべてのことを通して明らかにされる方です。そして、そのことを私たちは疑うことがありますけれども、その度に思い出し続けることです。歴史がそのことを教え続けてくれました。

たとえば、自分の兄弟たちに裏切られエジプトに奴隷として売られたヨセフも同じでした。彼が置かれていた状況は、だれがどのように見ても最悪のものでした。しかし、そのすべては神様の計画から外れたものだったのでしょうか？いいえ、それも神様のご計画のうちでした。創世紀50:20にこのように書いています。「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。」と。勘違いしてはいけないのは、神様は単純にヨセフに起こった悪い出来事を後で良いものに変えたという話ではありません。神様は最初からヨセフの状況のすべてを用いて、ご自身の栄光を現そうと計画されていました。それが私たちの主権者なる主です。またヨセフだけではありません。イスラエルの民を率いるように命じられたモーセも同じでした。出エジプト記の3章で、主からその務めを命じられた時、モーセは「自分は口下手ですから無理です」と言いました。「神様に従うことは無理です、そのような責任は果たせません」とかたくなにしぶり続けていました。そして、そのような彼に向かって、神様はこのようにことばを言うのです。出エジプト記4:11-12にこのように書かれています。「:11 【主】は彼に仰せられた。「だれが人に口をつけたのか。だれが口をきけなくし、耳を聞こえなくし、あるいは、目を開いたり、盲目にしたりするのか。それはこのわたし、【主】ではないか。:12 さあ行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたの言うべきことを教えよう。」と。モーセにとって自分のことば足らずな性格は、欠けている弱さだと思いました。それが主に忠実でいられない原因だと思いました。しかし、その弱さですら神様が最初から創造して、ご計画されていたものでした。すごいと思いませんか？

しかし、このようなもの以上に顕著だったのは、イエス様の十字架でした。何の罪も犯されていない神のひとり子が、人々から嫌われ、憎まれ、拒まれて、そして苦しめられた後、最後には神の御怒りを受けて亡くなりました。だれの目で見ても悪に思えるこの出来事は、偶然だったのでしょうか？いいえ、これも神様のご計画でした。使徒の働き2:23-24でこのように言われています。「:23 あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。:24 しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。」と。イエス様が十字架にかかったのは、アダムが罪を犯したから、その罪の結果を見て、神様がああしまった、だからイエス様を送ろうと決めたものではありません。アダムが罪を犯す前から神様はイエス様を送って、十字架にかけることを決めていました。私たちの目にはよくわからないことだらけです。そして、私たちの頭では理解できないことだらけです。しかし、確信を持って言えることがあります。それは善であり、知恵に満ち、あわれみ深く、主権者である神様はすべてのものを働かせて、私たちの益としそして、ご自身の栄光を現されるお方でした。たとえ私たちの目に良いと思われない病気や苦しみさえも通して、神様は私たちの弱さのうちに働いて、私たちがその時はわからなかったとしても、私たちの信仰を強めさせ、成長させ、そして、何よりもご自身の偉大さを明らかにされるために用いるのです。神様が与えているものに何の目的もないものはありません。そこには必ず目的があります。そして、主の姿を覚えるのであれば、私たちはすべての答えを知っている必要はありません。私たちの慰

めは、なぜという理由を知っていることから来るものではありません。すべてのことを必ず用いられる主の目的に目を留めるところからやってきます。そのような変わらない主、変わらない目的、この方に心を留め続けることです。そして、その方に心を留め続けるのであれば、私たちは主の栄光を現すために、主のみわざに日々励んでいくことです。地上に置かれている時間は短いです。私たちにできる働きは限られています。だからこそ、忠実になしていくことです。

イエス様は、ヨハネ9：4－5でこのように述べられていました。「4 わたしたちは、わたしを遣わした方のわざを、昼の間に行わなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。5 わたしが世にいる間、わたしは世の光です。」と。果たして、私たちは日々直面している苦しみをどのような目で見ていますでしょうか？そして、その中でどこに希望を見いだしているのでしょうか？以前大きな事故にあって、生涯車椅子生活を余儀なくされたひとりの姉妹ジョニー・エリクソン・タダも次のようなことばを残していました。「何十年も前、浅瀬に飛び込んだ衝撃で首を折り、体が麻痺したとき、私は神に対して避けて通れない大きな問いに直面しました。それまでの私は、神について浅いところで足を濡らす程度の理解で満足していました。しかし、体の自由を失ったそのとき、私は一気に深い海へと投げ込まれたのです。眠れない夜更けに、私は神に問い続けました。「神さま、この出来事の背後におられたのは誰ですか。あなたですか、それとも悪魔ですか。これはあなたが許されたことですか、それとも定められたことですか。私はまだ信仰の浅い者です…もしあなたが愛の神なら、なぜこんなにも厳しいことをなさるのですか。」それから50年以上が過ぎました。しかしその間、神が私に対して冷酷であったことは一度もありません。それどころか、神は親しい交わりの中で、優しさと深い慰めをもって、私の問いに答えてくださいました。その交わりは、何ものにも代えがたいものです。たとえ再び歩けるようになることと引き換えであっても、決して手放したくはありません。私にとって何よりの慰めは、自分の人生が神の大いなるご計画のうちに、しっかりと抱かれていると知ることです。」と。どのような時でも主はご自分のわざを現そうとして働いておられる主権的な目的を知ることは、すべての信仰者にとって、大きな励ましを与えてくれる主の慰め、あわれみでした。

3. 主の力 6－7節

次に、三つ目に見て取れる場面は、主の力です。世の光として来られたお方は、暗やみの中にいる者を助け出す圧倒的な力を持っておられる方でした。6－7節にこのように記されています。「6 イエスは、こう言ってから、地面につばきをして、そのつばきで泥を作られた。そしてその泥を盲人の目に塗って言われた。7 「行って、シロアム(訳して言えば、遣わされた者)の池で洗いなさい。」そこで、彼は行って、洗った。すると、見えるようになって、帰って行った。」と。あまりにもシンプルですけれども、驚くべき光景がここに描かれていました。イエス様は盲人が必死に助けを求めたからではありません、彼の方から目を治してくださいと訴えられたからでもありません。イエス様は彼の必要をご覧になりました。そして、救いの手を自ら進んで差し伸ばしたのです。彼の目に泥を塗り、そして、池に洗いに行くようにと命じられました。その結果、彼の目は見えるようになりました。生まれてから一度も、何も目にしたことのない者がイエス様のあわれみの力によって、一瞬にしていやされたのです。

気づいたと思いますけれども、不思議な情報が付け加えられていました。著者ヨハネは、ここでイエス様が盲人に行きなさいと伝えた“シロアムの池”の説明として、わざわざ「(訳して言えば、遣わされた者)」ということばを足していました。どうしてだと思いませんか？何の意味もなく足したのでしょうか？もちろんそうではありません、考えてください。イエス様はこれまでもご自身が父なる神様から世に遣わされてきた存在なのだと人々の前で明らかにされ続けていました。世の光として来られた御子は、救い主として父から遣わされた者でした。そして、そのような遣わされた者が遣わした場所、“シロアムの池”で目の見えない、暗やみの中にいた者は救い出されたのです。遣わされた方、イエス様は確かに苦しむ者

に救いを与えることのできる世の光、力ある救い主でした。これが、私たちが愛している救い主、主の姿でした。

しかし、この場面にはさらに驚くべきことが書かれていたのです。盲目だった人の肉体の目が開かれたこともすばらしいことです。しかし、それ以上に彼の霊的な目もイエス様によって開かれていきました。いま一度、何が起こったのか少し考えてみてください。イエス様が盲人に伝えたことは、「行って、シロアムの池で洗いなさい。」だけでした。イエス様は目の見えない者に対して、「よく聞きなさい、泥を塗って、シロアムの池に行き、その泥を落とせば目が見えるようになりますから、あなたはそれをしなさいね」というような約束はいっさいしていませんでした。もし私たちが彼の立場だったらどのようにしますか？いつもの通りで目の前をいろいろな者が通り過ぎていく中で、目の見えない彼は、急にだれかわからない人から目に泥を塗られて、「池で洗って来なさい」と命じられるのです。間違いなく彼は驚いたでしょう。しかし、彼は「また今度にします」と後回しにすることはしませんでした。彼はそのことばを聞いた時、イエス様のことばにすぐに従いました。何もできない無力な自分に、あわれみをかけてくれた方のことばをすなおに信じ受け入れたのです。そして、ここにイエス様がもたらしてくれる真の救いの姿を見ることができました。世の光として来られた救い主は、罪の中、盲目で暗くなっていた彼の心に働いて、その目を見えるようにされました。真理に気づけるようにと、かかっていたおおいを取り除かれました。ですから、彼は真理であるイエス様のことばに従うことができたのです。

そして、これはキリストに出会ったすべての罪人、私たちにとっても同じことでした。みことばははっきりと何度も述べていました。生まれながらの罪人は、例外なく主の栄光を見ることのできない霊的に盲目的な存在でした。Ⅱコリント4：4にもこのように書かれています。「その場合、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。」と。私たちが伝道していて、たまに不思議に思うことがあります。それは、私たちにとってすばらしいと思っているキリストをどれだけ伝えたとしても、その人が全然理解もしてくれなければ、受けようともせず、むしろ拒むような姿を見るのです。私たちはそのような者を見る時、どうしてこのようなすばらしいものを受け入れないのだろうと思ったりします。

しかし、それはかつての私たちの姿でもありました。私たちも盲目であった時、自分の救いに関しては無力な存在でした。今では喜びをもたらしてくれる福音の希望でさえ、見えなかった時には何の価値も見いだすことはできませんでした。しかし、そのような私たちに主が働いてくださって、主のあわれみを受けた時、すべてが変わりました。救い主が成し遂げてくださったみわざを知り、それを信じた時、私たちにとってキリストが何よりの宝となりました。かつては何も関心を抱かず、むしろ拒んでいた福音やキリストが見えるようになったから私たちは、「私たちにとって何よりも宝です」と感謝する者と変えられたのです。したがって、もしキリストにあって喜びをみいだして生きているのであれば、みことばの真理を楽しみにし、主にある約束を期待して生きているのであれば、私たちは感謝することができます。それは決してあたりまえの状態ではないと言うのです。それはただ私たちにあわれみを示して、暗やみの中から救い出してくださった主のあわれみの力だと言うのです。私たちもかつては盲目でした。そこから助け出すことができたのは、世の光として来られたイエス・キリストだけでした。

4. 衝撃を受ける人々 8-12節

そして、最後に四つ目に見て取れる場面は、衝撃を受ける人々です。残りの箇所8-12節を見てください、このように書いています。「:8 近所の人たちや、前に彼が物ごいをしていたのを見ていた人たちが言った。「これはすわって物ごいをしていた人ではないか。」:9 ほかの人は、「これはその人だ」と言い、またほかの人は、「そうではない。ただその人に似ているだけだ」と言った。当人は、「私がその人です」と言った。:10 そこで、彼らは言った。「それでは、あなたの目はどのようにしてあいたのですか。」:11 彼は答えた。「イエスという方が、泥を作って、私の目に塗り、『シロアムの池に行き洗いなさい』と私に言われました。それで、行って洗うと、見

えるようになりました。」:12 また彼らは彼に言った。「その人はどこにいるのですか。」彼は「私は知りません」と言った。」と。この場面を思い描いてみてください。間違いなく、彼の姿を目にした人たちの驚きはとんでもなかったでしょう。近所の人たちだけではなく、いろいろな人たちが集まって来て、口々に話していたのです。えっ、あれはずっと「物ごいをしていた人ではないか」、「いやいやいや似ているけど別人ですよ」、「長年盲目だった人が見えるようになるなんてありえません」と。彼の姿を目の当たりにした人たちは、当然のこのように非常に困惑していました。そして、そのような中で、見えるようになった人は、自分の身に起こった出来事をドラマチックに語っていましたか？「聞いてください、私の目は見えるようになりました」と大声で自慢していました。いやされた彼がしていたことは、自分をいやして下さった方をあかしすることでした。彼もすべてを理解していたのではありません。12節で人々は彼に聞いていました。「その人はどこにいるのですか。」と。しかし、これはすこし愚かな質問だと思いませんか？ 目が見えない人に「どこにいたのですか」と聞いてもわからないのです。しかし、彼はすなおに言っていました。「私は知りません」と。この時点で、彼はイエス様のことをすべて理解していたのではありません。しかし、自分が値しないあわれみを受けたことを知っていた彼は、ただ主がなして下さったことを大胆に語っていたのです。「イエスという方が、泥を作って、私の目に塗り、『シロアムの池に行って洗いなさい』と私に言われました。それで、行って洗うと、見えるようになりました。」と。これこそあわれみによって、救われた者の姿でした。自分自身を語るのではありません。あわれみを受けた者が語るができるのは、あわれみを与えて下さった方のことです。

果たして、私たち自身の日々のあかしはどうでしょうか？ 私たちも私たちを変えて下さった方を知っているのなら、私たちを変えて下さった方に人々の目を向けようとして歩んでいるのでしょうか？ それとも変えられただけに過ぎない何もない自分に、人々の目を向けようとしているのでしょうか？ 来週、私たちはこのいやされた人物について詳しく見ていきます。ただ言えるのは、イエス様と出会って新しくされた彼の生き方は、光である方をあかしするのに大胆でした。読んでいけばわかりますけれども、この後、彼はイエス様を憎む者たちから何度も、何度も脅されることになります。彼がどれだけ話しても、全く彼のことばを理解できない者たちや、理解する気のない者たちから責め立てられ、苦しめられることになります。生涯、目が見えない苦しみを味わい続けてきた彼は、目が見えるようになった直後も別の苦しみを味わうことになるのです。しかし、その苦しみを彼は喜びとしました。見えなかった自分が見えるようになった喜びが、彼を突き動かしていたのです。

見えないことが見えるようになるのは、すばらしい喜びをもたらすことでした。ですから、もしまだこの主にある喜びに盲目である方がいるのなら、それをまだ知らない方がいるのなら、どうかきょう主のあわれみを求めてください。あわれみ深い救い主は、何よりも私たちの罪のために十字架にかかって死なれ、そして、ご自身の愛をはっきりと示して下さいました。この方にある喜びを、どうかきょう知って帰ってください。またもうすでにこの方にある希望を知った皆さん、私たちは喜んでいことができます。かつて罪の中で盲目だった私たちが今は見えるようになりました。かつて、盲目で拒んでいた神様に、信頼して生きていくことができるようになりました。だからこそ、どのような時であろうともご自分の栄光を必ず現される主に信頼して、そして、世の光として来られた方をあかしする者として、この一週間もともに成長していきましょう。